

狭衣の道心

大原, 一輝
香川県主基高校教諭

<https://doi.org/10.15017/12357>

出版情報：語文研究. 6/7, pp. 56-65, 1957-12-30. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：



狹衣の道心

大原一輝

美

狭衣物語は狭衣大将の物語である。そこには狭衣と彼をめぐる幾人かの女性との恋愛交渉の過程が描き出されてゐる。即ち、彼の周辺には従妹源氏の宮を始めとして飛鳥井

姫、女二宮、一品宮、宰相中将の妹（藤壺）等幾多の女性達が賑々しくあらはれて彼と交渉を持たされてゐるのである。然し狭衣はこれらの女性との恋愛交渉には一途に透徹

することが出来ず、むしろ消極的優柔不斷的態度を示すのみならずまた早くから厭世觀宿世觀を懷いて道心を志す人物として描かれて居り、最後には藤壺を得て帝位に即くといふ安易な結末に終らされてゐるのである。この狭衣の表面華やかな恋愛漁色の反面に宿る厭世的彼岸憧憬的態度、いはゞ現実執着と逃避といふ二面的な生活態度の不徹底さは彼を絶えず煩悶の中に世を過させてゐるのであるが、之

は又一面「源氏物語」の宇治の世界を物語の出発点とし、薫をその主人公に模し来るといふ平安朝後期物語の通有席でもあつて見れば、此処にその宿命的な狭衣の煩悶を道心といふ面から採り挙げて眺めて見るのも意義ある事と思はれるのである。

二

始めて狭衣の道心の深化の過程について見ると、狭衣は最初から現世を厭ひ彼岸を望む人として描き出されてゐる。物語は狭衣十八歳の春から説き起されてゐるのであるが、「御才などは唐土にや類あらむ、この世には、今も昔も」類なく、「手など書き給ふさま」、「琴笛の音」、「はかなき御言の葉、氣色」に至るまで才色兼備の理想的な人物として描かれてゐる所から彼は宣耀殿や一条宮の姫

君を始め所々の女性達とも文の贈答を交はす等華やかな女性交渉を持つのは当然であつた。然し彼はこの反面「如何なるにか御身の程よりはいたく静まり」て、「心の中」は「この世は、かりそめにあぢきなきもの」、「この世はかりそめにものすさまじ」と思し、又世の人々からも「少し物すさまじき様」、「無心にものすさまじき人様」と思はれてゐる（以上卷一上）。さうしてこの心は「この世はありはつまじき始めにや」と心細く思ひ（卷一上）「世の中にありはつまじき夢」を見（卷二上）、「憂き身の宿世思し知」られ（卷三下）、「宿世などもつきて、世にえ長からぬやうも待ちなむ」（卷四下）等となつて最後まで至る所でその短き世、宿世の程が歎かれてゐるのである。この冒頭からの、いはゞ先天的に持ち合はされてゐる狭衣の厭世觀宿世觀は、之をその出生以前から筆を起されてゐる「源氏物語」の光源氏と比較すれば、源氏のそれが極く自然的に萌え出で漸く發展して行つたのは異つてゐる。またその起因について見ても光源氏のそれの如く、周围の人々の死や自ら侵せる罪業に対する反省悔悟の念、或は薰の如く自己の出生に対する懷疑といふやうな明確な動機を持つものではなかつた。然し狭衣とても人の死や自己の罪悪感が一層その心を強めるものとなつて來てゐることはいふまでもないのである。

次に之を各女性との関係について見ると、彼の恋の対象であった女性達が、飛鳥井姫の誘拐入水、女二宮の出家入道、源氏の宮の斎院託宣等となつて何れも相次いで狭衣の住む塵俗の世を離れて彼の手の届かぬ世界に去つて行くのであるから、「これや宿世ならむ」（卷一上）、「これやさは免れがたき契の程ならむ」（卷二上）と夫々飛鳥井姫や女二宮との邂逅を宿世と考へ、「今自ら宿世などいふものある人も侍らむ」（卷三中）、「唯この御有様（註源氏の宮）に劣る宿世あらば世にもあらじ」（卷三下）と宿世の人を捜し求めようとした彼には、それらの人々との別離についてもその都度「わが御宿世の程口惜しう」（飛鳥井姫）（卷一下）、「後の世にさへすてられ奉るべき宿世にや」（女二宮）（卷四上）、「わが宿世の口惜しうもありけるかな、これを我ものと見奉らずなりにけるよ」（光源氏の宮）（卷四中）等とその宿世の程を知らされると共に諦めきれぬ歎きの心が重ねられてゆくのである。さうして之等の狭衣の世を去りゆく女性達の中で先づ源氏の宮と飛鳥井姫について見れば、狭衣はその思慕する源氏の宮内への噂を耳にしては「我身もうき世を思ひはなれぬ日数も残なきやうに思ひ」ひ歎かれると共にかの狭衣を天上に誘つた天稚御子の面影を今更の如く思ひ出しては「いみじう恋し」がり、また斎院神託の場合にも「限あらむ命も長らへ

やるべからむといみじう心細」くて、「見えぬ山路にも諸共にや……」と一層諦めきれぬ縁言を述べる等何れも残された我身のひたすらこの世ならぬ世界への逃避憧憬が示されてゐるのである（卷二下）。また式部大輔に誘拐され蟲明の瀬戸に入水した飛鳥井姫に対しても、その菩提を弔つて追慕の情を示す（卷三上、卷四下）ほか「おくれじと契りしものを死出の山みつせ川にや待ちわたらむ」（卷三下）と彼の世の飛鳥井姫を偲び、高野詣で姫の兄の僧と廻り合つてからは「阿私仙人につかへむ事をのみ」思ひ立ち（卷三下）、「阿私仙の待遠に思ひおこすらむ」と遁世を忙ぐ心が見られるのである（卷四上）。かくて之等は何れも狭衣の恋慕する女性達が神の庭、仏の国に召されてあらぬ世界に去りゆくのに対して彼が注連の外に残され、憂き世に留まらねばならなかつた宿命への歎きであり、そこから募らされた現実逃避、彼岸憧憬であつた。しかも之等の女性達は何れも神や式部大輔といふ狭衣の与り知らぬ、いはゞ外的なもの力によつて彼の世界から手の届かぬ他の世界に失はれ去つたものである。

之に対して、女二宮や一品宮について見ると、この二人の女性の出家は全く狭衣自身に起因するものであり、何れも自ら塵俗の世を逃れ去つたものであつて、狭衣の住む世からの離れ方はこの点前二者と異つてはゐるが、この場合

にも矢張り彼の彼岸を望む心は強く動かされてゐることには変りはないのである。即ち、女二宮の入道は狭衣の一時的な好心の働きに起因するものであり、狭衣との間の若宮の出生は単に女二宮の落飾のみならず、その母宮をも苦しめ死に赴かせてゐるのであるから、狭衣の自己の罪惡への悔悟の結果起される遁世の心が先の二人に対する場合にも増して深化されてゐるのは当然であらう。狭衣は女二宮の出家に「今ぞ世に見えぬ山路も求め出づべき月日来にける心地」し（卷二下）、「なほこの世脱れ」て「少し思ふ事なき身となればや」、「世を背きなむの本意いと深くて」と言ひ（卷二下）、或は一品宮降嫁の後には今更の如く女二宮事件の「報い」を知つて（卷三中）嵯峨院の法華八講の果ての日「今ぞ心のうち少し涼しうなりて、年頃の本意も遂げ侍りぬべかんめる」と語り、母宮への慚愧の念からは「かの……人（註母宮）の悪業の離れ給ふべきしるべとは必ずなりなむかし」と「偏にぞ思ひ立ち給ふ」のであつた（卷三下）。また一品宮の場合に見られる狭衣の遁世の志は他の女性に対する場合と異つて、出家した一品宮の人に對してなされたものではない。然し宮とは、狭衣のたゞかの飛鳥井腹の姫君に逢はんばかりの一念からのみ結ばれたものであつて見れば、狭衣の一品宮に對する疎縁からくる夫妻間の不和は遂に宮を出家させるに至ると共に、

他方この思はしからぬ夫妻関係は彼に煩はしい人の世を厭はせ、彼岸に憧れさせるに充分なものがあつた。「今はかたがた世にな在りそと、仏などの示し給ふなんめりと見えつれば、ひとへに思ひ立つ事一つより外の心」なく、「年頃の本意遂げべきなむめり」と思ひ続けてかたはらに臥し給へるは「いとすさまじ」きばかりでなく、今更の如く「ありし天稚御子」をまたも「この頃ぞ思ひ出で」、「普賢の御光」も忘れ難くて（卷三中）彼は遁世の志を愈々堅くするのであつた。

かくて狭衣自身或はその他の内外の動因から次々に恋慕の対象がこの世から失はれてゆくことに依つて彼の厭世觀宿観は漸く深化されてゆくのであるが、それと共に狭衣の遁世の「本意」が最も具現化されようとしたのは彼の高野詣と竹生島詣に於てであつた。然し狭衣はこの最も道心の深化された時でさへこの世への執着を断ち切れずして道心の具現実行は遂に成就を見ないまゝに終らされてゐるのである。即ち、彼の高野詣の直接動機は源氏の宮が斎院としてこの世を離れ去つたことに因るのであるが、すでに飛鳥井姫はこの世になく、出家した女二宮も心動しさうにないといふこの世の女性に対する絶望的な境地に立たされた狭衣の失意の果てに決行されたものである。しかるに狭衣は一つには「例の事に触れてまづ思し出で」られる源氏の

宮への愛着と、他面「行方なく聞きなし給ひて、いかばかり思ひ歎かむ」父母の情愛にひかれて、「恋しさもつらさも同じほだにして泣く／＼もなほ帰る山かな」と出家は思ひ留められて居るのである。また帰京後に於ても「けざやかなりし仏の面影恋しく思ひ出で」られ、「いかでこの世を、様あしからぬやうにて厭ひはなれなむ」と一匁行ひに心を入れるのであるが、「思ひ佗びつひにこの世は捨てつとも逢はぬ歎は身をも離れじ」と絶えず源氏の宮が忘れきれずに居るのである（卷三上）。また次の竹生島詣に於ても「なみだのみ淀まぬ川とながれつゝわかるゝ道ぞ行きもやられぬ」道中を「引き返さるゝ心地」された（卷三下）のは偏に「この世のはだしにと仏などのしおき給へるにや」と覚し（卷二下）、「是より外のうき世の慰めはあるまじ」（卷三上）、「唯、この御有様にこそ思ひわづらひぬれ」（卷三中）といふ若宮に心ひかれた為めであつたし、賀茂明神の神託に驚いて狭衣を追ひ留めて諫める父堀川大臣の心惑ひに「いとかばかりまで思ひあくがけれむ心のほど」も我ながら「つらくいふかひなく思」はれて引帰されてゐるのである（卷四上）。此処では狭衣が父や我が子に対する情愛にひかれて出家が思ひ留められてゐるのであるが、また賀茂明神の神託が彼を強く現世に引留めてゐる所に彼の将来を決する神の力を認めねばならないのである。

次いで狭衣は一品宮との不和と反面源氏の宮、飛鳥井姫君、女二宮・若宮等への執心の煩悶の中に最後には「今二三年だに過し」て之等の「絆どもをふり捨てゝ世をそむきなむ」と堅い決意の程を示すのであるが、宰相中将の妹を得るに及んでは「この世を捨てがたきものと思ひな」るに至つて強い現実の肯定、道心の否定が見られて來てゐるのである（卷四下）。

かくて故き飛鳥井姫への追慕、源氏の宮の斎院決定、女二宮の出家並びに母宮への悔悟、一品宮との不和等が生来厭世的な狭衣に道心をかきたゝせたものであり、就中源氏の宮の斎院決定は彼に出来実現を志さしめた直接最大の動機となるものであつた。然し之等の現世に於ける苦惱や绝望が彼を道心に赴かせたとはいへ反面狭衣には源氏の宮を中心とする女性思慕の情が飽くまで断ち切れず、女性及びその子達への愛着、また父母堀川大臣夫妻の愛情、賀茂明神の引留めに依つて道心の具現が阻止されてゐるのである。さうしてかゝる狭衣の道心の不徹底さはむしろその対称的なものとして、「女二の宮の尼になるこそ又いとうれしけれ」と言ひ、「いとあてやかによき人なり」と言はれてゐる（無名草子）。女二宮や一品宮の出家人道が、自ら現世との絆を断ち切つた道心の具現断行者として無名草子の作者からも同情的立場に於て見られてゐるのであるが要する

に狭衣の道心の不如意が、それを阻止するものとして、源氏の宮以下の女性達への異性的恋慕の情と両親及び我が子への肉親的恩愛の情に加うるに神の力に因るものであつたと言へるのである。換言すれば現実的な人間的愛情と超現実的な神的意志によるものであつた。さうしてこの中で狭衣に對する超現実的な神の意志は始め彼から源氏の宮を斎庭に召し去り（卷二下、斎院神託）乍ら竹生島詣では彼の出家を阻止し（卷四上、賀茂明神神託）て、現世に留めしめたのみならず遂には彼を帝位に即かせる（卷四下、天照大神神告）に至つてゐるのである。其處には超現実的不自然性が指摘されるとはいへ、作者の物語構想やその背後の思想性乃至は宗教性が窺はれるのであるが、兎に角こゝに狭衣の道心の「本意」の坐礁には彼の力の及び得ぬ宿命的なものが働いてゐることが認められるのである。然し狭衣はそのやうな宿命の下にあり乍らも尚道心と愛執との解決に努力を続けようとしてゐるのであるから次に彼の現実的な人間的愛情の面を先づ肉親的恩愛の点から採り上げて彼の道心との關係を眺めて見ようと思ふ。

狭衣の父母堀川大臣夫妻の狭衣に對する愛情が、狭衣の

三

出家の志が高野詣、竹生島詣となつて具現されやうとした時、之を阻止せしめた事は既述の通りであるが、この狭衣を現世に留めんとする両親の愛情は女二宮降嫁を「思ひおきてつる年頃の本意」といひ（卷二上）、一品宮降嫁についても「年頃の本意は叶ひにたり」と覚し悦ぶ（卷三中）父堀川大臣の「本意」に極言されるものである。しかもそれは厭世勝ちな狭衣に対して「夢ばかりも哀をかけ給はむ人をば、いひ知らぬ賤の女なりとも、玉の臺に育まむ事を思」ひ（卷一上）、「よろづ珍しく例なき」狭衣の有様に「天稚御子の天降り給へるにや、今日や天の羽衣むかへ聞え給はむ」と静心なく（卷一上）、高野詣から無事帰京しては「止めがたげなる」嬉し涙にむせぶ心であり（卷三上）、竹生島詣の折の「御心惑ひ」ともなるもの（卷四上）で、何れも偏に我子狭衣の現世での幸福を強く願ふ心からに他ならぬのであつた。さうしてこの心から「年頃の本意」も叶へられるかに思はれた一品宮の降嫁も、狭衣の宮に疎縁なるを「あるまじき事」と覺して諫めるのであり（卷四中）、女二宮や源氏の宮への思慕からあらぬ方に向はむとする狭衣に「この御心をおぼし直させむ。少しも心留め給へらむ人もがな、限あれば、男はさてこそあくがるゝ心もとまるらめ」と歎き（卷四上）、「思しとまりぬべからむ人」を「唐国までも尋ねまほしげに思しさわ」ぐのが現はれて來てゐるやうに思はれるのである。

であり（卷四中）、宰相中将の妹を得、やがて狭衣の受神について入内するや「あさましく思し浮れたりし御けしき」も少しなほり、「かくありがたき御位」にも定まり給へるに「いとゞ疎ならざりける御宿世のほどさへ見附くべきこと」と「本意」の成就に喜びを見せてゐるのである（卷四下）。かかる大臣の「本意」に見られる父母の愛情は狭衣の持つ遁世の志を留めしめたのみならず、むしろ彼の現世的な好心の側に立つものとして、その適度な安定落着を願つてこの世に幸福安住せしめようとした遙かに現実的現世的地上的なものとして狭衣に働きかけたものであるといへよう。

かくて彼の遁世の実現を「今二三年だに過して」と言はせてはゐる（卷四下）ものの、彼を此処まで現世に留めて来たものとして父母の愛情が茲に強く認められて来るのである。さうして之を平安朝の物語思潮の面から見れば、狭衣の源氏の宮思慕に見られる如き竹取物語以来の浪漫的理性追求思慕の精神は残され、継承されてはゐるものの、その理想性は時代と共に次第に現実的地上的要素が濃厚に附加されて來てゐるのであり、しかも最も地上的な人間的愛情の点からすれば、平安朝後期物語には異性愛から肉親愛へ、恋愛至上的から家族愛的へといふ傾向の一面が現はれて來てゐるやうに思はれるのである。

従つて「狹衣」のこの内親的家族的愛情は「夜寢覚物語」等の平安後期物語を経て中世物語へと継承発展されてゆくその過渡的萌芽を示すものと言へるものであらう。然し狹衣物語に於ては、この外部から狹衣をこの世に捉えて放すまいとする父母の強い愛情は現実的現世的とはいへ、むしろ餘りにも世俗的要素の濃厚なものとして、結局は終始彼岸を望んでやまない狹衣にとつては一層この世の煩悶を加へしめるものに他ならなかつたのであり、父母の此岸的「本意」と狹衣の彼岸的「本意」の齟齬錯綜は狹衣に「世とともに物をのみ思して」過す「前の世の契」の許に懊惱を続けさせるのであつた（巻四下）。かくて狹衣にとつては外面的受動的な父母の現世的肉親的愛情は、彼を現世に留めしめるに与つて力があつたことは一應認められるものの、その道心との相剋対決に当つては決して決定的解決を与へるものではなかつたし、彼の道心はそれ程安易輕薄なものではなかつたのである。

また狹衣の肉親にひかれる愛情はかかる受動的な父母の愛情の他に女二宮腹の若宮や飛鳥井腹の姫君に對する強い能動的なものが見られる。狹衣が高野に出家を決意する前後には一度ならず「契ことに哀なりける人」若宮の姿に後髪ひかれる思ひに道心が鈍らされ、「この底の藻屑だにあらましかば」（巻二下）といふ飛鳥井姫の子を探し得ては

に「世とともに物をのみ思して」過す「前の世の契」の許に懊惱を続けさせるのであつた（巻四下）。かくて狹衣にとつては外面的受動的な父母の現世的肉親的愛情は、彼を現世に留めしめるに与つて力があつたことは一應認められるものの、その道心との相剋対決に当つては決して決定的解決を与へるものではなかつたし、彼の道心はそれ程安易輕薄なものではなかつたのである。

狹衣の異性的愛情即ち所謂彼の好心は、先づ弥生の頃の源氏の宮に対する恋として強く燃え上つて来る。然しそれが、源氏の宮からは「思し疎まれこそせめ」、大殿母宮などには「世に任せ給はじ」、また世間からも「ゆかしげなく、けしからざもあるべきかな」と思はれるであらう様々の思惑の中に成就し得ぬまゝに飛鳥井姫以下の女性との交渉に入つてゆくのである（巻一上）。さうして之等の女性に対する彼の恋情は道心に於けると同様その対象に徹底したものではなかつた。狹衣の前に現はれてくる女性達は何れも過去的追慕的な存在になると同時に常に常に従妹源氏の宮

四

との比較の下に於てしか考へられてゐないのであり、それがまた狭衣の好心の特色でもあつたのである。

即ち、「わざとけだかく誠し」く、「まことしくやむごとなき際」の源氏の宮に比べて、「怪しきまでらうたく」、「唯なつかしうあはれ」と思はれた飛鳥井姫は、その誘拐入水後も愈々狭衣の追慕は募る一方ではあつたが、それはたゞ「さる方の下草の露のかごとも慰めつべかりけるを」と源氏の宮を手に入れ得ぬ狭衣の一時的な慰みの対象としてしか思はれてゐないものであり（卷一下）、姫の入水後遺品の扇を得て夜もすがら泣きあかすといふのも「限なき御歎の森のしげさ」に「やごとなからぬ程の事」は「まいて思し消ちしにこそはありしか」と絶えざる源氏の宮思慕の餘り他の女性を閑却してゐた狭衣にとつては、道季の話を聞き、遺品を手にした上で追慕にすぎず、矢張り想ひは常に源氏の宮の上にあることを物語つているものである（卷二下）。

また女二宮に対しても、帝から宮の降嫁を約束された狭衣は「いでや武藏野の夜の衣ならましかば」と思ひ（卷一上）、「卯月ばかりに」と降嫁が具体化されようとしては「われも人（註源氏の宮）もさまぐに定まりて、今はと思ひはなれて世にありなむや」と源氏の宮ならぬ女二宮の降嫁を拒み続けるのである（卷二上）。さうしてこの心

からは、ふとした行がかりから女二宮と契を結ぶに至つた後に於ても、女二宮と思ひ定めてしまふ事を「くち惜しうおぼさ」れ、「一方に思ひそめにし」源氏の宮を思ひ切り得ず、反面また彼の入水した飛鳥井姫を「まづ思し出でられぬ折な」く偲ぶのであつた（卷二上）。やがて宮は出家し一品宮が降嫁されるが尙も宮を思ひ切れぬ狭衣は消息を続けてゆくのである（卷二下以降）。かくて狭衣の飛鳥井姫や女二宮に対する恋は、現前する女性に透徹するといふよりはむしろそれらの女性を通して、遂げられぬ想ひの源氏の宮の姿を絶えずその背後に認めて思慕してゐるのが判るのである。さうしてその現前の女性達は次々に狭衣の世を離れ去つてゆくのであるから、至る所で「道芝の露」（飛鳥井姫）、「嵯峨野の花」（女二宮）等の象徴的表現にあらはれた之等の女性に対する追慕の情は、源氏の宮が斎院となつて神の御前に召されるに至る悲しみの中にも「今片つ方」の女二宮の「つらさも恋しさ」も忘れ難く思ひ出され、また飛鳥井姫も「物思ひの序にはなほおぼし出でら」れてはゐるもの矢張り「なほためしなくぞ思ひこがれ給」ふ源氏の宮喪失の悲歎に比すべくもないのである（卷二下）。そこには狭衣の愛の分裂性の一面が見られるとはいへ矢張り源氏の宮に対しては一層追憶思慕の中心的女性としての憧憬が強く認められるのである。

次にこの狭衣の女性に対する源氏の宮中心的思慕は一品宮について見ても、その降嫁の後、女二宮の「らうたげに美しかりし御色様」をも「なほ室の八島には立ち竝び給はざらむ」と女二宮と比較した源氏の宮の美しさを挙げ、他方この一品宮の見劣りされるのも「理ぞかし」と貶めてゐる（卷三中）し、また宮の容貌の「いとゞにほひなく、すさまじき心地したる」にも、ありし雪の朝の源氏の宮の「花やかな色合よりも珍らしうも見えしかなと、まづ思ひ出」されてゐるのであつた（卷三中）。さうしてこの一品宮との不和は、やがて宮の出家薨去となつて遂に和解を見せず終るのであるが、そこに見られる狭衣の愛情の強量さも、たゞ故飛鳥井腹の姫君、入道の宮女二宮、若宮等あらぬ人々への執心に依るものであり、就中斎院源氏の宮への追慕が強く働いてゐることに依ることは否み難いものである（卷三中以降）。

又狭衣の女性遍歴は最後に宰相中将の妹を藤壺として入れせしめることに依つて終つてゐるのである。この場合にも尚源氏の宮を思ひ出しては「くらべ苦しき心の中」は「なはいとわりな」く、藤壺に「わが御宿世のめでた」を感じながらも矢張り御心の中は「更にやすかるべくもな」いのであつた（卷四下）が、しかしこの「みたらし川のおもかげさへ立ち添」ひ、「思ふ人に似たまへ」る（卷

四中）源氏の宮に似通つた藤壺を得たことによつて茲に遂に「見奉り初めしよりこそは、この世を捨てがたきものと思ひなりにしか」とまで言はせるに至つてゐるのである（卷四下）。

かくて狭衣の異性恋慕の情が源氏の宮中心的であつたといふことは宮が斎院となることによつて彼の心をひたすら現実逃避に向けさせたのであつたが、源氏の宮に対する思慕が強かつただけにそれがまた一方ではその幻影を求めてこの世の女性への遍歴執着に向けさせられ、またその形見の子達への後髪ひかれる思ひともなつて愛執超越が不可能のまゝ道心は深められずに終つてゐるのである。しかしながら源氏の宮中心的異性追慕の特色を持つ狭衣の好心は、反面そのまゝ「過ぎし世」、「ありし世」を追憶すると共に、塵俗のこの世を去つた女性達の住む「あらぬ世」を憧れる心も失はれ去つてはゐないのであるから、茲に現実的地上的愛欲的な異性恋慕の情が浪漫的理想的天上的な彼岸憧憬的なものとして「今二三年だに過して」といふ道心をも捨て切れぬ歎きともなつてくるのである。さうしてこの現実執着と逃避の二面にひかれる狭衣の矛盾的態度は受禪神託後の斎院との告別、飛鳥井姫供養、嵯峨院の女二宮訪問のはれの世界に「世とともに物をのみ思して過」す姿を沈めてゐるのである。

五

最後に之をこの物語の構成上から一瞥すれば、狭衣をめぐる恋の物語は冒頭の源氏の宮への慕情から藤壺入内に至つて大団圓に終る線を経としてゐることは、「源氏物語」の藤壺、紫上、「浜松中納言物語」の唐后、吉野姫の線に似通ふものがあり、狭衣対源氏の宮恋愛譚が一篇の骨子をなすものであることは明白で、その間に緯として織り込まれた飛鳥井姫、女二宮、一品宮各物語は夫々独立の様相を呈し乍らも各女性は何れも狭衣からは源氏の宮との絆の下に結びつけられ眺められて、勝れた構成の緊密さの一端が示されてゐるのである。しかも物語は最後には狭衣を帝位につかせ、源氏の宮に似通ふ藤壺を入れさせ、また飛鳥井腹姫君や女二宮腹の若宮の裳著・元服等を賑々しく描く等餘りにも現世的世俗的な榮華を重ね描いて性急に終結づけようとしてゐる。其処には宇津保的、落窪的大団円の結末に急ぐあまり精神界に於ける退敗に替ふるに物質的権勢の世界に主人公を救はんとした所謂めでたし型の物語終結の定跡が窺はれるのであるが、それでも尚狭衣の愛執と道心の相剋が未解決の中に満たされ得ないあはれの世界を以て筆を留めている所に狭衣の特色が認められるのである。しかし之を源氏物語に比する時、そのあはれの世界は單なる

気分的な世界に終つてゐるものに過ぎず、かの藤壺事件、女三宮事件に於ける源氏の愛憎の究極に見出された人間観や宿命との対決、或は不幸な宿世の下に大君、浮舟を失ふに至る薰の道心と愛執の人間的苦惱に充ちた世界ほど悲劇的なものとはなり得てゐないのである。

註、引用文は有朋堂文庫「狭衣物語」に依つた。
附記、本稿を草するに当り岡山大学教授森岡常夫博士より御懇切なる御教示を頂いた。記して謝意を表します。